

カンボディア・ 西トップ寺院の調査

— 第5次・第6次 —

1 はじめに

奈良文化財研究所では1993年より文化庁と共同でアンコール文化遺産保護に関する研究協力事業をおこなってきた。2002年からは西トップ寺院を対象遺跡に定め、測量などの基礎的データの集積と、考古学や保存科学の調査をおこなってきている。本年度も2回の現地調査をおこなった。以下にその成果を概説する。(杉山 洋)

2 第5次調査

仏教テラス造営時の大規模な整地は、掘込地業を伴うのか、盛土のみであるのかは、これまでの調査でも明らかにされていない。そこで第5次調査では、仏教テラス北側のCトレンチを北へ2.5m延長する新たな調査区を設定した(Dトレンチ)。調査期間は2006年8月7日～8月10日、調査面積は7.5㎡である。

地表から約1.1m掘り下げたが、地山まで到達せず、遺構は確認できなかった。整地土中からは少量の土器とともに、青銅器小片、彫刻のある砂岩石材、レンガ片などが出土した。(豊島直博)

3 第6次調査

仏教テラス東側から東周壁までの前庭部の様相を確認するため、東西9.5m、南北3mの調査区を設定した(Eトレンチ)。トレンチの南壁が寺院の東西軸と一致するように設定した。調査期間は2007年1月25日～2月2日、面積は約25.5㎡である。今回の調査では、寺院の建築の最終段階を示すと考えられる上層遺構に加え、部分的に下層遺構の存在も確認することができた。以下では第6次調査で検出した遺構について報告したい。

上層遺構

現地表面から20cmほど掘り下げると、明灰褐色の硬い面の広がり確認され、この面からテラスの地覆石(ラテライト製)を据え付ける掘形、および周壁(東壁)のラテライト石列を据え付ける掘形を検出した。また、周壁近くでは、結界石の基底部を原位置で確認し、据付掘形を検出した。さらに、テラス前面に方形のラテライト製の

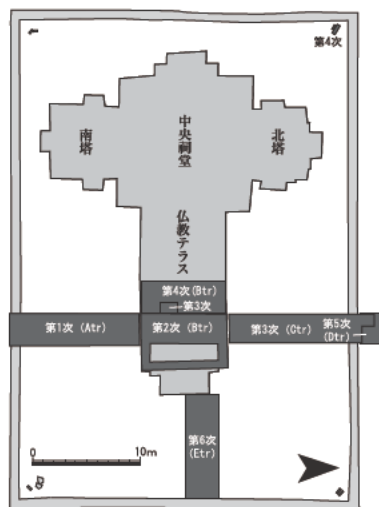


図8 西トップ寺院の調査位置図 1 : 500

小基壇を確認した。

テラス地覆石 仏教テラスの外装石材は砂岩であるが、地覆石だけはラテライト製であることはこれまでの調査で既に確認されている。地覆石は掘形の中に半ば埋没するように据え付けられていた。地覆石の下には砂礫を含む土が敷かれたことが確認されているが、これは地覆石を安定させるため敷かれたと考えられる。テラス南側のAトレンチでは、地覆石は据付掘形をとまわず、整地土の上に直接置かれたことが示されており、本トレンチの様相とは異なっている。本トレンチで確認した箇所は、テラスの東端の突出部の東側であることから、この箇所とテラス本体とは工法が異なる可能性がある。つまり、突出部は後から増築されたものである可能性が示唆される。

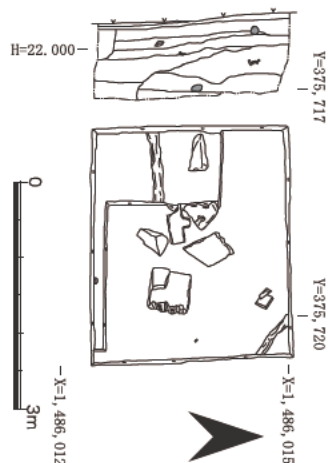


図9 第5次調査遺構平面図・西壁断面図 1 : 100

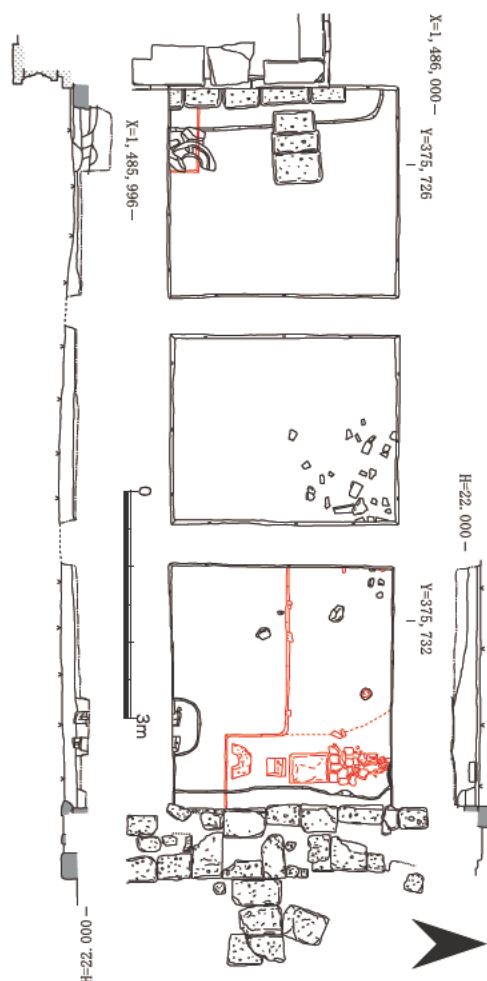


図10 第6次調査遺構平面図・南北壁断面図 1:100

周壁（東壁） 寺域を囲う周壁は幅1mほどのラテライトの石列によって構築されており、本来はある程度の高さをもっていたと思われるが、今では現地表面から10cmほどの高さに顔を出しているのが確認される。本トレンチがかかる箇所は寺院の出入口があったと思われるところで、外側に一對の突出部をもち、門のような構造物があったことを示唆する。周壁の基底の石は、掘形の中に半ば埋没するように据え付けられており、その下には砂礫を含む土が敷かれており、テラスの地覆石の据付け方と類似する。Aトレンチでは周壁の基底石も掘形をともなわず、整地土の上に直接置かれたことが確認されており、本トレンチと様相が異なっている。

結界石 カンボディアの仏教寺院では一般的に、寺域を示すための境界石が、寺域の四隅と各辺の中央に計8つ置かれる。このうちの東辺中央のものを除く7つは現地表面からも確認でき、第4次調査では北西隅のものについて据付掘形を確認する発掘をおこなっている。今回は地中に埋もれて未確認だった東辺中央のものを検出した。下半分が原位置で残存しており、平面楕円形の据付掘形も検出した。発掘は掘形を検出するに留めたので、

その下に鎮壇具が埋納されているかどうかは未確認である。

小基壇 ラテライト製の石材を3つ組み合わせた、東西90cm、南北60cmほどの小基壇である。これはテラス前面に南北一對に置かれたものと考えられ、南側のものは現地表面上に残存しており、石材を数段積み上げていた様子が確認できる。石を据え付ける掘形はなく、テラス地覆石の掘形の埋没後、整地土の上に直接置かれたものと考えられる。参道に置かれる獅子の石像を据えるための基壇かもしれない。

下層遺構

トレンチ東端では、整地土の構築状況を確認すべくさらに掘り下げたが、地表下30cmほどのところで、レンガ・砂岩・ラテライトが列状に並ぶ遺構を検出した。このうちラテライトの石材は、もともと真ん中が刳り貫かれた円盤状のものであったようだ。レンガの存在は、西トップ寺院の建築部材としてはこれまで確認されていなかったものであり、興味深い。レンガは一般的な建材だが、11世紀以降には主要な建材としては少なくなる。この下層遺構の存在によって、西トップ寺院の変遷や年代について新たな知見がもたらされるかもしれない。今回の調査では、それ以上掘り下げなかったため、この遺構の性格は不明であるが、次回以降の調査ではこの周囲も含めて発掘し、その性格を明らかにしたい。

（石村 智・和田一之輔）

4 まとめ

本年度の第5次調査で前面テラスを南北に貫く調査区の調査を一応終えることができた。その結果、テラスの構築時期やテラス内構築物の存在など、多くの成果を上げることができた。ただテラス周辺の遺構については不明な点が多く、第6次調査からは、その点の解明を目指してテラス前面に東西方向の調査区を設定した。その結果下層遺構の検出や、ラテライト周壁の構造などが徐々に明らかになりつつある。

本年度からは建築学的な調査も始まるとともに、向こう5年間のさらなる調査に向けての協定書の調印も無事終了した。今後、さらに様々な視点からの調査を進め、西トップ寺院の解明を進めるとともに、将来的な計画についての議論を深めていく必要がある。（杉山 洋）